土器・瓦 10

焼塩壷と花塩壷

http://www.kyoto-arc.or.jp
（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

焼塩壷（後列）と花塩壷（前列）
江戸時代の町家跡（烏丸通五条）から出土

近年、東京や大阪などの大都市の再開発で発掘調査が増え、研究が進むにつれて江戸時代の遺跡の重要性が指摘されるようになってきています。

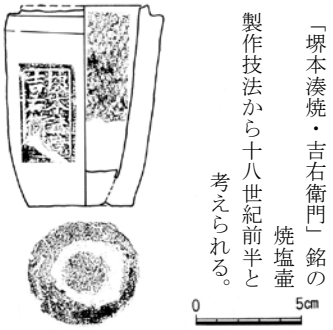
これらの遺跡から出土する様々な遺物のなかで、焼塩壷は考古学では基本的な作業となる遺構や共伴遺物の時期決定の基準に欠かせない資料の一つになっており、比較的早くから注目され研究されています。その理由に、焼塩壷は伝世されずに中身の焼塩が空になるとすぐに捨てられ、製作から廃棄までの時間差が少ないことや、それぞれ異なった刻印があり、短期間にこれを変えていくことがあげられます。さらに、塩壷屋に関係する文献史料が多いこと、器壁が厚く壊れにくいので、発掘作業でのサンプリングエラーが少ないことなど、他の出土遺物にない幾つかの特性を持っているからです。

焼塩壷は精製塩をつくる過程で使われるもので、粗塩（あらじお）をこの壷に詰め、焼返して苦汁（にがり）を取り除くための容器です。生産業者としてこれまでに知られているのは、泉州（せんしゅう）湊（みなと）系・泉州麻生（あそう）系・播磨（はりま）系・京都の深草系・木野系などがありますが、江戸時代中期以後には「泉州麻生」銘に似せた偽の刻印を持つものが多く現れて、その生産と流通の過程がより複雑になっていきます。

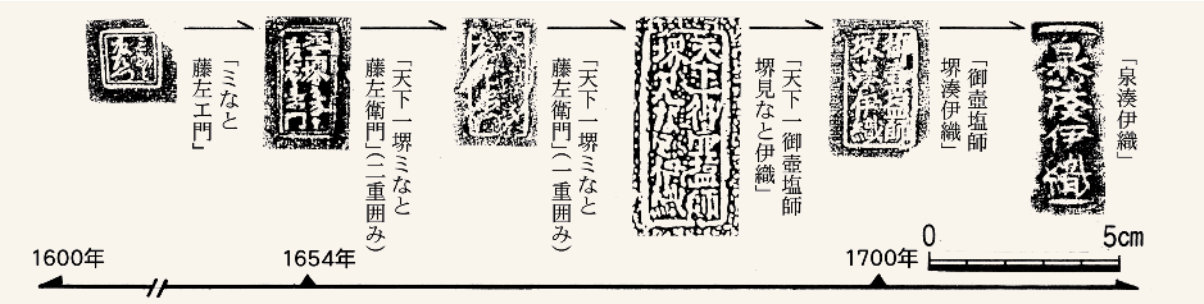
また、出土遺跡をみても江戸時代中期以後からは、大名屋敷や寺社関係、豪商の屋敷といった限られた階層だけでなく、一般の町屋跡からもみられるようになります。普通、焼塩は炮烙（ほうらく）で煎れば簡単につくれますから、わざわざ焼塩壷でつくった純白の焼塩が贅沢なものであったにしても、江戸時代前期のように、大名や寺社の専用品ではなくなったことを示しています。これは、他の陶磁器が量産化され大衆化していく画期（かっき）とも一致します。

市内の調査地では焼塩壷は各所でみられるのですが、花塩壷は出土例が少ないこともあって京都ではあまり注目されていませんでした。ところが最近、烏丸通五条の調査地から焼塩壷と共に花塩壷も多く出土したのです。そのなかには、今まで類例の知られていない「堺本湊焼（さかいほんみなとやき）・吉右衛門」銘の焼塩壷（下図）や、大変珍しい器形や刻印の花塩壷が含まれていました。

花塩というのは焼塩と違って、あらかじめ粗塩を落雁（らくがん）のように形作って焼返したものです。その容



新たに見つかった焼塩壷



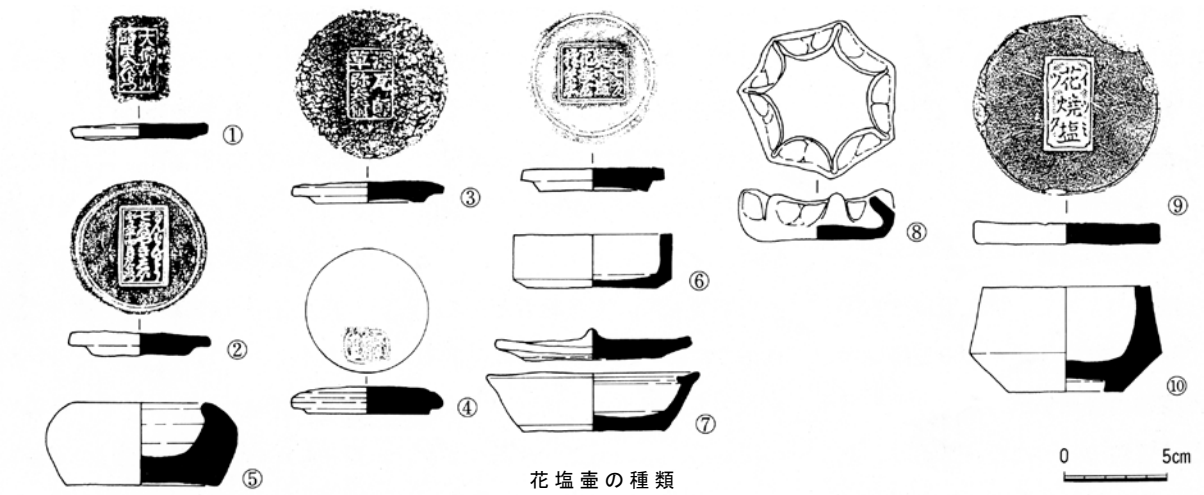
泉州湊系焼塩壷の刻印の変遷　（渡辺誠「物資の流れ―江戸の焼塩壷―」『季刊考古学 13』1985 雄山閣）を改変

器としての花塩壷も丁寧で可愛らしくつくられており、用途も焼塩とは少し違ったものと考えられます。例えば、岡崎の遺跡からは江戸時代のカマドの下から五個一組で並べられて出土しており、祭祀（さいし）に使われた可能性があります。また、刻印には焼塩屋の銘だけでなく瓦屋の銘もあり（下図①③）、近年までは瓦屋が盆や暮れなどに配ったという例もあったようです。

ところで、前述の烏丸通五条の調査地から出土した花塩壷と、京都市内の遺跡でこれまでに出土したものとを全般にみたところ、泉州産の花塩壷はこれまで一系統しかみつかっていませんが、京都産の花塩壷には幾つかの器形や刻印があり、出土量も多いことがわかりました。しかし、同時代の大消費地であった東京の遺跡からは泉州産のほうが京都産のものより多く出土しています。これは、生産と供給体制の整った大手メーカーである泉州産と、京都の在地メーカーとの販路の違いだろうと思われます。

焼塩壷と花塩壷は、ほぼ江戸時代と消長を共にする遺物だけに、近世都市社会での生産と流通を考えていく上で大変興味ある資料ですが、考古学的研究だけでなく、江戸時代の文献・絵画・民俗資料などと併せた総合的な検討が必要なことはいうまでもありません。

（能芝　勉）



花塩壷の種類

①～④は⑤の器形に類する身にともなう蓋と考えられている。この他に「なんばん里う七度やき志本」（富小路通竹屋町）、「なんばん七度本やき志本」（名古屋城三の丸遺跡）などの刻印が知られている。
⑥は身の器形が異なるが、刻印が④と同系になるもの。
⑧は花弁に様々なバリエーションをもつもので、古いものは一乗谷朝倉居館（1573 年焼亡）にみられる（渡辺誠「炊塩壷」『江戸の食文化』1992）。なお、烏丸五条の調査地でも破片が出土している。
⑨は⑩にともなう蓋で京都市内では出土例がない。
⑩は旧麟祥院跡や東京、名古屋で数点出土している泉州産のもので、蓋の刻印と身の形態に何種類かの違いがある。

①「大佛瓦師・蒔田又左衛門」『高倉宮・曇華院跡第 4 次調査』(財)古代学協会 1987
②「奈んばん里う七度やき志本ふか草四郎左衛門『左京六条二坊六町』(財)古代学協会 1986
③「深草・瓦師・弥兵衛」『平安京土御門烏丸内裏跡』(財)古代学協会 1983
④「深草・砂川・権兵衛」⑤⑥「本七度焼御塩花塩屋権兵衛」下京区烏丸通五条出土（財)京都市埋蔵文化財研究所 1990 年度調査
⑦ 左京区岡崎天王町出土（財)京都市埋蔵文化財研究所 1988 年度調査
⑧ ③と同じ。
⑨「イツミ・花塩壷・ツタ」『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書２』1990
⑩ 上京区小川通一条下る出土（財)京都市埋蔵文化財研究所 1989 年度調査